

バレエダンサー

二山 治雄

(にやまはるお)

株式会社 日立製作所
執行役常務

馬島 知恵

(ましまちえ)

Create
New
Values

【ダイジェスト版】

バレエと社会イノベーション

17歳でローザンヌ国際バレエコンクール1位となり、卓越した技術と端正な動きで日本のバレエを牽引する若きダンサー、二山治雄氏 27歳。日立のデジタルシステム&サービスセクターで社会イノベーション事業を取りまとめる、バレエファンの日立製作所執行役常務、馬島知恵。バレエの魅力から社会課題の解決に至るまで、興味深い展開となった対談をダイジェストでお届けします。

日立再発見

馬島 尊敬するバレエダンサーであり、バレエスタジオのオープンクラスでは時々先生として教えていただいている二山さんとの対談、楽しみにしていました。本日はよろしくお願ひいたします。まずは私の方から自己紹介させていただきます。私は日立という企業の中で大きく二つの役割を担っています。一つはデジタルシステム&サービスという部門のチーフ・マーケティング・オフィサーとして、お客さまとのより良い信頼関係を築き、お客さまの課題に答えながら事業やビジネスを拡大していく役割です。もう一つは、少子高齢化や環境問題と言った社会全体が抱えている課題を、デジタルを

生かして解決をめざす「社会イノベーション事業」を進めています。この二つの役割を、短期・中期という異なる時間軸を自分の中で融合させながら、日々の仕事をしています。ちなみに二山さんは、日立と聞いてまず何をイメージされますか。

二山 CMの影響かもしれませんが、洗濯機や掃除機といった家電のイメージが強いです。

馬島 そうですよ。日々の生活の中で直接お客さまがお使いになる機会が多いのは家電分野なので、そういう方が多いと思います。でも日立は、例えば二山さんがよく利用される新幹線の鉄道車両も作っています。



二山 えつ、そうなんですか。

馬島 はい。車両だけではなく、列車を時間通り安全に走らせる運行制御システム、みどりの窓口のチケット発券システムも日立なんです。皆さんの目にはなかなか直接触れることがないですが、こうした鉄道やエネルギーなどの社会インフラを支えることを得意とする会社が、日立です。

二山 家電よりもっと身近なところでお世話になっているなんて、知りませんでした。

やられる方が好きなのですか。

馬島 はい。もうずいぶん長くやっていますが、いつも上手くできない動きなどを抱えていて、毎回0.1ミリでも前進したいという思いがずっとあり、練習し続けています。バレエは単に体を動かすだけではなく、練習の積み重ねをしていくことが心の鍛錬にもなりますし、音楽と動きを合わせることも魅力です。また、たまに二山さんの踊りをオープンクラスで間近に拝見できることもとても勉強になっており、限られた時間をバレエにつき込んでいます。

二山 その気持ち、わかります。僕もバレエの魅力は何ですかとよく質問されるのですが、ひとことで答えるのがすごく難しいのです。でも子どもの時はもう本当に体を動かすのが大好きで、その欲求を満足させてくれるのがバレエだったし今も変わっていませんから、それはバレエの大きな魅力の一つだと思います。

ダンサーとして観客の前で踊るようになって感じることは、バレエは総合芸術であるという魅力

馬島 そうなんです。

二山 それでは僕の方も自己紹介させていただけます。フリーのバレエダンサーの二山治雄と申します。1996年長野県松本市生まれ、7歳からバレエを始めて、11歳から長野市にある白鳥バレエ学園の松本支部に入学し、塚田たまゑ・みほり先生の指導を受けるようになり、現在も長野と東京などを頻繁に行き来しています。

小、中、高校と普通に学生生活を送りながらバレエに取り組んでいましたが、2014年のローザンヌ国際バレエコンクールに出場して1位を獲ったことが一つの分岐点になりました。17歳の時でした。

そのあとスカラシップ*をいただいて、サンフランシスコのバレエスクールに1年間留学し、バレエ団の契約をいただいたのですが、自分の中でまだプロになるという意識や準備ができていなくて、日本に戻って休学していた高校に

です。一つの公演を行うために、ダンサーはもちろんのこと、振り付けや演出、音楽、舞台セット、衣装などすべてが揃わないと作品にはなりません。そしてみんなが一体となってより良いものを作ろうとする。バレエには順位やゴールがありませんから、もっと上があるはずとさらに高みをめざし続ける。ここに大きな魅力を感じます。

共感を協創の力に

馬島 二山さんのバレエの話を伺っていて、私は社会イノベーション事業ととても共通するものがあると感じました。今ある社会課題、例えば地球温暖化が問題なのは皆さんわかっています。そこから一人ひとりのアクションへはなかなかつながりません。もっと具体的な問題であることを自分事として認識してもらえれば伝え方が重要だと思っています。少し前に一緒に地域のグリーン関連のセッションをさせていただいた先生から、脱炭素を自分事として認識してもらうために、CO₂排出量を天気予報のように毎日住民の方々

復学し卒業しました。その後ワシントンバレエ団のスタジオカンパニーに入団し、同じ時期にパリ・オペラ座バレエ団の契約もいただいたので、翌年から3年間パリ・オペラ座で契約ダンサーとして活動しました。その後コロナ禍となり、一時帰国から現在まで国内外でフリーのダンサーとして活動しています。

バレエの魅力

馬島 私は小さい頃にバレエが題

材の漫画やドラマがあつて、バレエに対してすごく憧れを持っていました。学生時代は新体操や器械体操部に入っていたのでバレエを習う時間がなかったのですが、社会人になってしばらくして、自分でスケジュールの調整がある程度できるようになってきた頃、「やっぱバレエがやりたい」と思い、バレエ団のオープンクラスに入り、そこから継続してレッスンを受けています。

二山 公演を見るよりも、自分で



二山 治雄 にやま はるお

1996年長野県松本市生まれ。7歳よりバレエをはじめ、小学校5年より白鳥バレエ学園にて塚田たまゑ・みほりに師事。2014年第42回ローザンヌ国際バレエコンクール第1位、ユースアメリカグランプリ シニア男性部門金賞。ローザンヌ国際バレエコンクールのスカラシップでサンフランシスコ・バレエスクールに留学。2016年ワシントンバレエ団スタジオカンパニーに入団。2017～2020年パリ・オペラ座バレエ団契約団員として入団する。アブダビ、シンガポール、上海ツアーにも参加。2020年、コロナ禍の中帰国。以降フリーのバレエダンサーとして、さまざまな舞台で活躍中。2023年に東京新聞制定で日本の洋舞界で活躍する若手ダンサーに送られる「第29回中川鋭之助賞」を受賞。来年には初めての写真集も出版予定。

馬島 知恵 ましま ちえ

1989年、日立製作所入社。2018年、社会ビジネスユニット 公共システム営業統括本部 営業統括本部長。2019年、理事/日立オーストラリア社 社長。2023年4月、執行役常務 営業統括本部副統括本部長 兼 デジタルシステム&サービス担当 CMO兼 社会イノベーション事業統括本部長。



に伝えると理解できる
のではないかという
話を伺いました。人の生
活に近い内容で伝える
ことが、理解から共感に
つながる近道だと思
います。

伝え方を工夫してい
くことで、社会課題の先
にある未来への共感を
広げていきたいと思っ
ています。社会課題は、
日立だけではとても解
決できるものではありません。
同じビジョンを

共有した仲間が絶対に必要です。
未来の社会への共感があれば、
行政やアカデミア、地元企業な
ど、異なる世界の方たちとの協創、
コラボレーションが可能になり
ます。

バレエの舞台を作り上げるため
に、ダンサーや音楽や美術や衣装
などそれぞれの役割の人たちが
一つになるのは、少しでも良い作
品にしたいという思い、共感が全
員のベースにあるからですね。そ
れはお客さまを感動させるという



ビジョンが、しっかりと共有され
ているからだと思います。社会イ
ノベーション事業もまったく同じ
です。進むべきビジョンへの理解
と共感がベースで、トライするこ
とで見えてくる課題をまた次に向
けて皆さんと力を合わせて解決し
ていく。その繰り返しです。

二山 一緒ですね。ダンサーとお
客さまとの関係も、見せて終わり、
チケットを買ってもらって終わり
ではなく、真剣なお客さまの声を
いただいて次はもっと良い舞台に

よつと思いました。

馬島 それは、何だったのですか。

二山 アルバイトです。僕の高校
生活はバレエ一色でしたが、周り
の友人たちはいろいろなアルバイ
トをやっている、仕事の話など
をよくしていました。そういう
普通の高校生が通る道を通して、
こなかったことを思い出して、
生まれてはじめて履歴書を書いて
アルバイトに応募したのです。
馬島 どういうアルバイトだった
のですか。

しようというキャッチボールが
あります。そういうサイクルから、
より大きな感動が生まれるのだと
思います。
馬島 そう、プラスのサイクルで
すね。何かを1回クリアすればそ
れで終わるものではなく、少しづ
つ少しずつより良くするにはどう
していくかをしっかりと話し合っ
て、お互いの共通点を見つけ信頼
を高めていくことが重要なので
す。そういう意味で社会イノベー
ション事業とバレエは、本質的に
共通するものがあると思います。

コロナ禍だから 気づけたこと

馬島 バレエダンサーに
とって、約3年間のコロ
ナ禍は、生活や意識に大
きな影響があったと思
います。その時のこと
について、教えていただけ
ますか。

二山 僕はパリ・オペラ
座の契約団員として、
2019年の12月31日ま
で公演がありました。そ

二山 朝3時から9時
まで、24時間営業をして
いるスーパーで品出し

をしながらレジ打ちを
するというアルバイト
です。レッスンをトレ
ーニングは毎日通常通り
にやりながらできるバ
イトということで、その
時間を選びました。

馬島 それだと寝る時
間も取れなかったの
ではないですか。

二山 それでも3ヶ月

時間は眠れました。そのアルバイ
トではじめてお給料をいただいた
時に、僕の中では自分で仕事をし
てお金を稼いだことが本当に新鮮
で、感動しました。ただのアルバイ
トですが、何かはじめて社会に貢
献できたように思えたのです。今
まで舞台で出演料としてお金はい
ただいていましたが、「これは仕事
なのか」という思いがずっとあっ
て。金額は少額でも、アルバイトで
稼いだことにとっても大きな価値を
感じました。その後も介護施設で
アルバイトをしました。僕は資格

れを終えて2週間の冬休みがもら
えたので、日本に帰国しました。契
約は2020年の1月半ばまで
で、次の契約が3月からだったの
で、休暇を取るにはちょうどいい
タイミングだったのですが、帰国
した直後に日本でも感染者が確認
され、パリに戻るができなくな
りました。
馬島 そのタイミングでコロナ禍
が広がっていなければ、二山さん
はパリに戻っていたのですか。
二山 そうなっていたと思
います。しかし2020年に入って



を持っていないので、簡単な事務
作業とヘルパーさんのお手伝いを
する仕事でした。

馬島 記事などで二山さんが一時
期アルバイトをしていたことは
知っていたのですが、そこまで過
酷な生活をされていたことは知り
ませんでした。驚きました。

二山 アルバイトを経験し、自分を
見つめ直すことで、僕のバレエに
対する考え方も変わりました。そ
れまでは、常に自分を高めるため
に厳しくバレエと取り組んできま
した。でもアルバイトを通して、

二山 これから先が
まったく見えない状況
になりましたが、今まで
海外に住んで、ダンサー
として生きることには必
死だった僕には、はじめて
自分を見直す余白の時
間ができました。これま
でバレエだけしか経験
してこなかった自分に
改めて気がつき、この
コロナ禍でなければで
きないことをやってみ



馬島 今日日本には約36万人もバレエを習っている人たちがいて、バレエ人口は世界で一番多い国だそうですが、二山さんは日本バレエの

次世代の課題

馬島 おっしゃる通り、本当に終わりがないです。

二山 ありがとうございます。少し理解できるようになりました。でもそれって、終わりがないですよね。

それをデジタルの力を使い解決に導いていくのが、私たちの仕事です。Society 5.0 for SDGsというの、こうした身近な課題を抽出し、デジタルを活用して解決していくことで持続可能な未来を作ろうというものです。

けるビジョンと一緒に描きます。日立市でも他の地域と同様に高齢化は進んでいます。大きな特徴は山側と海側の事情の違いです。日立市の場合、山側の急峻な土地に団地がたくさん建っていて、そこに住んでおられる高齢者の移動がウェルビーイング向上の課題であることがわかってきました。

誰かの役に立つことの喜びが湧いてきたのです。人に喜んでいただくためにがんばること、それが本当の仕事なのではないか。自分ではなく、舞台を見にきていただいたお客さまを幸せにする。これからはそのために踊ってみようと思から思えた時、自分自身とても納得できて何か案になったのです。

社会イノベーション事業のめざすもの

馬島 私たちはさまざまな社会課題を抱えているというお話しをさせていただきましたが、それを一つひとつ解決してサステナブルな社会を実現していく。それが社会イノベーション事業の目標です。

現在の状況をどうお考えですか。
二山 私の体感としては、バレエを習われている方の割合は大人の方が多くて、学生や子どもは減っていると思います。その理由はさまざまで、僕が正確にお答えすることはできませんが、お金がかかるとか、子どもたちがバレエと接する機会が少なくなっているとか、いろいろあると思います。一つ

私たちがめざす社会を「Society 5.0」という言葉で表すことが多いのですが、これはAIやロボットといった技術革新を取り入れながら、人や環境の調和をめざす社会という意味でSociety 5.0と呼びます。ChatGPT*に代表される新しいテクノロジーを生かすことで、健康・医療、農業・食料、環境・気候変動、安全や防災、人やジェンダーの平等など、地球環境と共存しながら今ある社会課題を解決して、こう、それがSociety 5.0 for SDGs*です。

もう少し具体的な例でお話ししますと、日本では都市に人口が集中して地方ではさまざまな問題が発生しています。私は、日立製作所発祥の地でもある茨城県日立市の方たちと会話させていただくことが多いのですが、地域の課題と一口に言ってもそこで起きている課題は地域の歴史や、人口や産業の構成、地形や気候などですべて条件が異なります。日立市と、二山さんが生まれ育った長野県松本市では、地域の課題は違います。
二山 おっしゃる通りです。

言えるのは、プロになれる人が限られていて、あまりに狭き門だということが知れ渡ってしまっている。で、残念なことに最初からバレエを選択肢からはずしてしまうご家庭が多いということです。子どもは感受性も豊かです。バレエでなければ得られない学びがある。でも、それを知っていただけたら日本のバレエの未来はより明るくなるのかもしれない。

馬島 次の世代を育てるとい意味で考えると、日立の場合も必要な人財、力を発揮する人たちのタイプに変化が出てきていると思います。

デジタル事業の拠点をシリコンバレーに持ち、グローバルロジック社*という海外の新しい仲間が加わったこともあり、日立自体が内側から多様な組織へと変化し、それが加速

* グローバルロジック社:2021年に日立が買収した米国のデジタルエンジニアリングサービス企業。

* ChatGPT: OpenAIが2022年11月に公開した人工知能チャットボットであり、生成AIの一種。

馬島 私たちは、自分たちの持つ技術を組み合わせて解決策を押し付けるのではなく、その土地の歴史や地形、人口構成など根源的な状況を理解した上で日立市の方たちと課題を共有し、将来はこんな日立市になればいいと共感いただ

しています。これから海外の人たちと協創したり、新しい領域を開拓していくには、日本でも組織に頼らず多様性を力にして人を動かせるような強いリーダーシップやパーソナリティが求められますし、それを伸ばせる人財育成が必要だと思えます。

そろそろ時間がきてしまいました。二山さん、今日は本当に楽しかったです。これからのご活躍や来年出版される写真集も楽しみにしております。ありがとうございます。

二山 こちらこそ、ありがとうございます。お仕事もバレエも、引き続きがんばってください。

本誌ではダイジェスト版を掲載しました。フルバージョンをWebマガジン「Executive Foresight Online」に掲載しています。



https://www.foresight.ext.hitachi.co.jp/_ct/17668124